ラジオ放送

＜平成28年7月～9月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.416

もくじ ～*contents*

＜信心に出合って＞

☞信心をされていきいきとされている方を紹介します。

●**私を取りまく応援団**
京都府・鹿ケ谷教会　熊野俊文　*page 1*

●**毎日の神頼み**
広島県・安芸川尻教会　寺本公子　*page 6*

●**心の支え**
東京都・伊豆大島教会　牧野英一　*page 10*

＜平和＞

●**争いを生み出さない生き方**
大阪府・稗島教会　高島祥郎　*page 13*

＜ラジオドラマ＞「晴れのち晴悟郎」

☞「日常にこそ助かりの世界があることに気付く」をテーマにしたラジオドラマです。

●第１回　**晴悟郎誕生**　*page 18*

●第２回　**木陰のおかげ**　*page 23*

●第３回　**恋のうず潮**　*page 28*

●第４回　**ずっといっしょに**　*page 33*

●第５回　**橋渡し**　*page 38*

●第６回　**いいとこメガネ**　*page 43*

●第７回　**はいはい**　*page 48*

●第８回　**虫に喰われる!?**　*page 53*

●第９回　**ずっと晴悟郎**　*page 58*

《信心に出合って》

「私を取りまく応援団」

京都府・鹿ケ谷教会　熊野俊文

ナレーション

京都府にある金光教鹿ケ谷教会にお参りする熊野俊文さんは現在五十八歳。奥様とお子さん、お孫さんに囲まれて、毎日を元気いっぱいに過ごしておられます。

熊野さんは幼いころ、母と兄の三人家族でした。ところが…。

小学校低学年の時だと思うんですが、近所の友達と遊んでいる時に、そこのおばさんが、「あなた、あそこの子どもじゃなくて、妹さんの子どもだよ」っていうことを言われました。すごくそれが私にとってはショックで、すぐに家に飛んで帰って母に尋ねたんですが、「今は言えない。あなたが小学校六年生になったら言ってあげる」ということでした。

それまでにも、兄と言ってても、九つも年が離れているし、顔もどうも違うので何回か母に確認はしたんですが、「いや、あんたは私の子どもだよ」ということを言われたので、ずっとそれを信じておったところに、そういう青天のへきれきの話があったものですから、本当にびっくりしました。で、小学校六年生になるのを心待ちにして、六年の時に聞けば、やっぱりそうだったということで…。

ナレ　実は、生みのお母さんは、熊野さんが二歳の時にがんで亡くなっていたのです。父親も

おらず、独りぼっちになった熊野さんを、伯母さんが引き取り、我が子同然に育てていました。

衝撃の事実を知らされ、複雑な思いを抱いた熊野さんでしたが、金光教を信心する伯母さんの生き様に引かれ、母として慕っていきます。

子どもの時の記憶の一つなんですが、雨の日に、母(伯母)が買い物から帰ったのですが、慌てた様子でした。それで、急いでタンスの中から下着を取り出しまして、「私と一緒に来なさい」ということで、自宅の近くの橋のたもとで、大工さんらしき人たちが、雨でずぶ濡れになっておる。そこへ下着を持って、「これをどうぞ着て下さい」と。私は大事な下着、当時そんなに裕福な家庭ではありませんでしたから、「お母ちゃん、こんなん渡してしまったら」って言ったら、母は、「いや、これは神様がまた買ってくれるから大丈夫や」と言ったんです。その人たちに喜んでもらえるっていうことを見させてもらった時に、子ども心に親としての尊敬と言いましょうか、すべて神さんに任してるっていう安心感を持ってられる人でしたから、子ども心に、こういう人になりたいなあということを思ったことがあります。

ナレ　育てのお母さんの信心は、子ども心に深く染み入り、成人してからは、自ら教会へ足を運びました。

友人の紹介で二十五歳から勤め始めた印刷会社。ところが給料がとても安く、それは結婚して妻と子どもを養う熊野さんにとって死活問題

でした。紹介してもらった友人への恩義もあって熊野さんは迷っていました。

四十歳のちょうど節目の時に、このまま辛抱すべきかどうか、ということを先生に相談しました。このまま我慢するようなみ教えを言われるのかなあと思いましたら、「いや、熊野さん。お風呂のお湯がぬるかったら沸かせばよい。ぬるいのがおかげだと思ってそのままにしている人が多い、と。そうじゃない。ぬるかったら沸かせばいいんですよ」というみ教えを頂いて、私の気持ちが吹っ切れました。

ナレ　先生の言葉が熊野さんの背中を押してくれました。お世話になった友人や印刷会社に礼を尽くし、思い切って退職。かねてから興味があった大きな砂糖の卸問屋への入社がかないました。

生活も安定し、それから十五年の年月が流れました。ところが…。

今からちょうど三年前の時なんですが、今で言う一種のリストラで、「辞めてもらえませんか」というお話がありました。まあ困ったなあと思いながら、でも神様にお願いしている中でのことなので、受けさせて頂きました。毎日自転車でハローワークに行き、毎日教会で、「先生、今日も仕事見付かりませんでした」という日々が続いておりました。再就職まで振り返りますと六カ月掛かりました。

ありがたいことですが、京都でも有名なあんこ屋さんに入ることが出来ました。

でも正直な話、その六カ月間っていうのは、毎日毎日やはり不安で、精神的にも参るような日々が続いておったんですが、その時にふと思わしてもらうのは、うちの母親がいつも、「神さんを離したらあかんよ」ということをずっと言ってましたもんで、毎日お教会に足を運んで、先生にみ教えを頂きました。先生がいつも口癖のように言われたのは、「腐ったらあかん。信心は楽しむもんやで」と。それがありましたから、苦しい六カ月間の日々を乗り切れることが出来たんだろうなあ、と今になって思います。

ナレ　信心に出合ってから今日までを振り返って、熊野さんには思うところがあります。

あのう、不思議なことって言いましょうか、小学校時代から今日まで、必ず私のそばに一人、私をカバーしてくれる人がいるんですね。

例えば私、リウマチ熱っていう病気を持っておりまして、小学校に七年行きました。今で言ういじめがあったんですね。その中でも、私をいじめの中からかばってくれる同級生もおりましたし、中学の時も、高校の時も、今でも社会人になっても、誰かがかばってくれる訳なんですね。導いて下さっている。そういう人が、今も現れている訳なんです。私のサポート役って言いましょうか。

これはどう考えても、神様、そして、二人とも御霊（みたま）さんになりましたが、生みの親、育ての親の御霊さんのお働きとしか考えられない。そんなにうまいこと、自分をサポートしてくれる人が現れる

訳がない。本当にありがたいものだなと思います。

信心させて頂いて、何が一番あなたのためになりますかって言うたら、やっぱり絶大な安心感が得られるっていうことですね。応援団いっぱいいますもん。

ナレ　二人のお母さんを始め、家族親族、教会の先生、そして、神様。心強い応援団に支えられて、熊野さんの人生は続きます。

《信心に出合って》第二回

「毎日の神頼み」

広島県・安芸川尻教会　寺本公子

皆さんは、苦しい時、悩んでいる時、不安でどうしようもない時、どのように乗り越えていますか。

窮地に立たされた時、思わず、「神様お願いします」と祈った経験がある方は多いと思います。「困った時の神頼み」とも言いますが、今の私の生活を一言で言うと「毎日が神頼み」です。

それは、困った問題に頭を抱えているからではありません。普通の日常が当たり前のことではないと実感したことで、「今日もいのちをありがとうございます。家族みんなが無事に過ごせますように…」と、日々のお礼とお願いを、金光教の教会にお参りして神様に祈るようになりました。それには、あるきっかけがありました。

私には、二人の息子がいます。ある時、当時四歳だった長男が熱性けいれんを起こしました。初めは何が起こったのか分からず、震える手で電話を掛け救急車を呼び、おろおろするばかりでした。一般的には、成長するにつれて熱性けいれんを起こすことはなくなると言われていますが、長男の場合は、その後、八歳まで、五回も救急車のお世話になり、入退院を繰り返しました。私は、息子が熱を出す度に、高熱になるのがただただ怖く、「神様助けて下さい」とすがるように祈るばかりでした。毎年寒くなると子どもの体調ばかりが心配で、いつしか冬が恐怖の季節になっていました。

そんな不安を抱えていたころ、何人かの金光教

の先生のお話を聞く機会がありました。その中で、「教会にお参りして、お取次を頂くことで、いのちが助かる」という内容を繰り返し聞きました。

「お取次」とは、神様と人との間を取り次ぐという意味です。教祖様によって始められたもので、参拝者の願いを神様に届け、神様の願いを参拝者に伝える。神様と人とが共に助かる生き方を求めていく、金光教の信仰の中心です。

私は教会で生まれ育ち、実家を離れてからも自分では信心をしているつもりでいましたし、お取次の大切さも理解はしていたのですが、そのころはあまり教会にお参りしていませんでした。それがこの時、先生方の言われた言葉が心に深く響き、「お参りして、お取次を頂くことでいのちが助かるとはどういうことなのか。自分で確かめてみたい」と思いました。それから、私は思い切って近くの教会を訪ね、その後毎日お参りするようになりました。

今、一年半ほどが経ったところです。お参りを始めて自分の中で何が変わったかというと、一番大きなことは「日々改まれるようになった」ことです。例えば、教会に一歩入る前までは、慌ただしい時間に追われて疲れていたり、不満があったりしても、ひれ伏してお祈りしていると、ありがたい気持ちが湧いてきて、反省させられたり、お礼の気持ちしか出てこなくなることがあります。

日常生活で心に積もった汚れを拭き取ってもらえるような感じです。毎日これの繰り返しで、また心の中にホコリも積もれば、汚れてもいくのですが、お参りすることで、汚れが染みにならないうちに洗ってもらえる。その日の汚れはその日のうち

にという「いのちの洗濯」をしている感じです。そして、お取次を頂くことで、たとえ自分の願い通りにいかなくても、そこにある神様のお働きや見守りを感じるようになりました。

日々悩んだり、迷ったり、落ち込んだりする私のような弱い人間にとって、そういう場所があることは、本当にありがたいことです。金光教の教会は、教祖様が世界中の人に開いた「救いの場」です。いつでも、誰でも、子どもでも大人でも、年齢や立場にかかわらず、お参りして話を聴いてもらえる。神様のお働きを学び、祈りを通していのちが助かる場所であることを改めて感じています。今では息子たちも、「今日も元気でいっぱい遊べますように」「野球の試合でヒットが打てますように」など、幼いながらに日々の出来事をお願いしていて、神様にお願いすることで、何かが変わるということを感じているようです。

おかげさまで、長男は、その後、熱性けいれんを起こすことなく、元気に十歳を迎えました。先日は、学校で『いのちのおはなし』という本の読書感想文を書き、学校の代表として選ばれました。国語が苦手な息子なので、意外なことで驚きましたが、そこにはこう書いてありました。

「自分の心臓や体の中のものは、自分で動かしているのではありません。人間はいろいろな働きによって生かされて生きているんだなあと思いました。…ぼくも与えられた自分のいのちの時間を、他の人のために使っていけるようになりたいです」

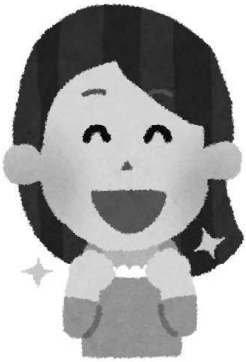
体の弱かった息子も、いろいろな方のお世話になりながら成長させて頂き、神様のお働きを感じて

いるのだと、とてもうれしく思いました。

金光教の教祖様は、「信心は日々の改まりが第一である。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら大みそかと思い、夜が明けたら元日と思って日々うれしく暮らせば家庭に不和はない」と教えて下さっています。

朝には今日のいのちのお礼と一日のお願いをし、夜には一日のお礼をする。そんなささやかな「毎日の神頼み」が、私にとっては今一番大事な取り組みです。

これからも教会にお参りしてお取次を頂き、どんな時も神様から頂いたいのちのお礼が出来る自分でありたいです。そして、家族の幸せと共に、一人で不安を抱えている多くの人が、このお道と出合えることを願っています。



《信心に出合って》第三回

「心の支え」

東京都・伊豆大島教会　牧野英一

私は伊豆諸島の一つ、大島にある金光教伊豆大島教会にお参りしています。

東京以外にお住まいの方からすると、伊豆諸島や小笠原諸島が東京都であることや、それぞれの島に公立の小中高等学校があることをご存じない方が多いのではないでしょうか。東京都内にお住まいでもあまり知らない方が多いとお聞きします。

私が初めて赴任したのは伊豆大島の中学校でした。それ以来、不思議と大島にある三つの学校を回りながら二十五年間勤務していました。これは大変珍しいことです。

では、なぜ伊豆大島にある金光教の教会にお参りすることになったのかと言いますと、初めての勤務先であった中学校で妻と知り合ったのですが、その妻が伊豆大島教会の娘だったのです。妻も私と同じ年に着任しましたが、今思うと、不思議な縁だったと思います。知り合った時は、当たり前かもしれませんが、妻が金光教の信心をしているなど一切知らず、ある時、伊豆大島教会の娘だということを知りました。

私は香川県丸亀市で生まれましたが、高校卒業後、大学進学と共に上京しました。実は私の父は金光教を信心しており、父の祖母も金光教の信心をしていました。今、思うと曾祖母の信心があって妻と出逢い、私がここにいるように感じます。

さて、私の日課は、出勤する前に伊豆大島教会

へお参りし、続いてお墓にお参りします。教会では、生徒の無事や家族の健康など、例えささいなことでも神様にお願いし、先生にお話を聞いて頂きます。そして、今日一日の始まりにお礼を申します。

教会にお参りをすると、「神様に任せている」という安心感から、不思議と不安が無くなります。いざ、何かあった時には、「金光様」と心の中で唱えます。こんな感じで生活の中に神様と共にあると私は感じています。

今から約三年前、平成二十五年十月十六日のことです。台風二十六号による土砂災害で、三十六名もの尊い命が奪われました。いまだに行方不明の方々もおられます。家屋の全壊は五十棟、半壊は二十六棟、一部破損は七十七棟という大きな被害を受けました。

私の家は土砂災害の発生した場所から約二十メートル程しか離れていない沢沿いにありました。土砂災害が起きた時、私たち家族は二階に寝ていました。台風が大島に接近するということで、いつも通りの台風対策をして夜を迎えていましたが、いつも以上の激しい雨音と風の音。そして、地響きのような奇妙な雰囲気に目が覚めました。

すると、突然、ドーンと何かが家にぶつかり、家が揺らいだのです。何事かと飛び起きるも、停電になっていたので何も見えません。手探りの状態で一階に降りようとすると、下からは雨風の音に加え、生臭い臭いが立ち込めていて、階段を降りていくと土砂が入ってきていました。携帯電話で警察に連絡をし、逃げるべきなのか、その場に留まるべ

きなのか尋ねようとしましたが、警察署内もパニック状態で状況がはっきり分かりません。そんな中、妻と娘の三人で沢の反対側から、土砂に足を取られながらも、高台の方へと避難しました。

夜が明け、外を見ると三原山は大きなひっかき傷が出来たような山肌となっており、大木が道を塞いでいるという状況で、ただあぜんとするばかりでした。そして、驚いたことに、私たちが歩いて逃げた所だけが、大木やがれきが無かったのです。

私の家は、大規模半壊という被害状況でしたが、神様に助けて頂いてありがたいという思いでいっぱいでした。

その後、教え子たちを含め、大勢のボランティアの方たちと共に、家の中の土砂の掻き出し作業や消毒、床下に潜っての土砂の除去、自衛隊の方たちによる道路の復旧作業やがれきの撤去作業など一年ぐらい掛けてやっと災害後の片付けが終わりました。

また、私の家は、伊豆大島教会の祭典会場でしたので、全国の金光教の教会から、お見舞いやボランティアの方たちの支えがあり、ようやく家の改修工事だけは終えることが出来ました。

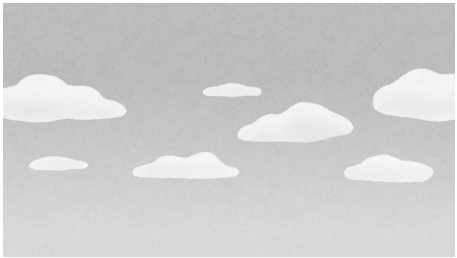
それでも、まだ大島全体の土砂災害における復旧事業は始まったばかりで、この先十年を掛けて取り組みます。現在でもまだ、安全で安心な状況とは言えませんが、今、こうしてあることに感謝の気持ちでいっぱいです。

多くの方々のお世話になり、その温もりに触れる中で、改めて、生かされていることのありがたさを痛感いたしました。

世の中色々なことが起こります。心を安らかに、日々の生活を楽しく過ごすためにも、信じるものがあり、心の支えになるものを持ちたいと思います。

「金光教って何？」と思われる方がいらっしゃれば、気軽に一度教会にお参りしてはどうでしょうか。悩みは誰にでもあるはずです。安心感が生まれ、きっと気持ちが楽になると思います。

最後になりましたが、台風二十六号による土砂災害で被災された方々に改めてお見舞いを申し上げると共に、亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。



《平　和》

「争いを生み出さない生き方」

大阪府・稗島教会　高島祥郎

ナレーション　今日紹介する高島祥郎さんは、昭和六年生まれの八十五歳。大阪の城下町、船場で生まれました。当時、高島家は、船場商人の娘さんたちに、三味線やお琴、生け花や茶道を教えていました。

幼いころの暮らしや、町の様子を伺いました。

昔から船場といったら、商売人の町ですし、割と生活は裕福でしたですね。

今のような外国からの食事はありませんけど、おすしとか魚料理とか、よくありましたね。

私はおばあちゃんの初孫なんで、可愛がってもらい、よく歌舞伎とかに連れて行ってもらっていました。だから母は、「あんたは幸せやで、毎日毎日あっちこっち連れて行ってもらって」と言っていました。

市電に花がいっぱい付けられて、花電車が走ってましたし、色んな国の行事がありましたらね、そら町を挙げての色んな記念パーティーとかね、そんなのがありましたね。何かそのにぎやかな雰囲気だけ覚えています。

ナレ　活気あふれる大阪で育つ中、昭和十六年に太平洋戦争が始まります。その翌年、小学四年生の時、一家の中心の父親が、咽頭(いんとう)がんで亡くなりました。今までの華やかな生活が、徐々に変わり始めます。

昭和十六年十二月八日に戦争が始まった時、僕ら子どもなりに、いくつかの軍艦を撃墜したということで、「バンザイ！」と、友達とえらい大騒ぎした覚えがありますね。

もう遊ぶいうたら戦争ごっこばっかりでした。当時の大統領の絵を書いて、それを竹やりでね、「えいやあ！」という、そんな遊びをしていましたね。

しかし間もなく、段々段々戦況が悪くなっていったわけです。

ナレ　戦争の影響が一層色濃くなっていく中、小学生の時、体験した痛みは今でも忘れられません。

私の担任の先生は、後に戦死しましたが、海軍将校で、非常に厳しい先生でしたね。ある日、雨降りの日に誰かが廊下を下駄のまま歩いたのがおりましてね。で、「誰が歩いたか？」って先生が聞いても誰も返事しませんねん。で、当時私の組は四十五名ぐらいおりましたが、「全員廊下へ並べ！」って言われましてね。前から順番に全員殴られました。「誰かが歩いているはずやけど、貴様ら返事をせん。それなら連帯責任じゃ」と。「戦争で一人がミスすると、全部殺されるんだ。そんな時代に、お前らそういう考えではならん」。で、私は背が低い方なので、前の方だから殴られるのがきつかったんですよ。そういう教育でしたもん。その当時は。

ナレ　生活全てが変わっていきます。服装も女性は着物からもんぺに。男性は薄茶色の国防服に。食料も配給となります。

非常に厳しかったですけど、これはうちだけじゃなくて、町会、皆さん方一緒でした。昭和十八年ぐらいになりますと、大根一本だけが町会に来るわけですね。それで五軒あったら五つに分けてね、仲良く皆それを頂いたですね。

お米も無くて、芋の端とか、野菜の残りとか、とにかく食べられるものは皆食べようということで、お米の入ってないおかゆさんに、まあいわゆる、今で言う豚の餌のようなものを皆頂いてましたですね。みんなそれは不足に言わずに、「日本が勝つためにはお互い不自由しましょう」というような、

そういうふうな状態でしたですね。非常に食べ物には不自由しましたですね。

ナレ　昭和十九年の末には、Ｂ－２９が夜に飛んで来て、警報が鳴り響く日が増えました。畳をめくり床を上げ、地面を掘った防空壕の中で、死ぬことを予感させられ、恐怖を感じました。

昭和二十年三月。母子家庭は国から強制疎開を言い渡されたため、母親の田舎へ移り住むことになりました。

町の子だっていうことでいじめに遭いましたけど、まあしかし、何カ月かするうちに、私も割と誰とでも合わすところもありましてね、すぐ仲良くなりました。

ただ、問題は皆、勉強をほとんどしていないんです。朝学校へ行ったら、「今日はどこそこの山へ行く」と言われて、ずっと山へ行って、松の根を掘り起こして、それをそこそこの大きさに切って、めいめい背負って、工場へ持って行きました。先生に、「これ何？」と聞いたら、「これはガソリンの変わりだ」と。「ガソリンが無いので、これを機械で絞って、この油で飛行機が飛ぶんだ」と、そう教えられたですね。

とにかくあの当時は勉強というよりも、お国のために尽くすということが徹底されてましたね。

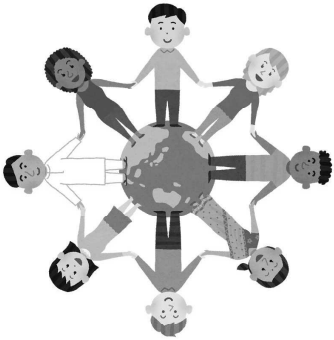
ナレ　その疎開先で終戦を迎えました。生まれ育った大阪は空襲を受け、住んでいた家も焼けました。当時の友達とも、誰一人連絡が取れな

くなりました。

その後、いくつか職を転々としますが、祖母の代から金光教の信心をしていたこともあり、金光教の教師となりました。

戦後は、色々と自由な時代になってきましたが、教育によって人生は変わる。だから戦争反対ということの前に、戦争をしないような教育が大事だと思います。また、教育というのは学校だけでなくて、家庭も職場も、全てにおいて、争うということの考え方をしっかり皆意識していませんと、自分さえ良かったらええ、わが町さえ良かったらええ、わが国さえ良かったらええということが大きくなったら戦争でしょう。正しい教え、教育をしてもらいたいですね。

ナレ　**高島さんは争いを生み出さないような在り方を求め、これからも、相手の助かりを願い、世界の平和を祈り続けています。**



《ラジオドラマ》

晴れのち晴悟郎

脚本　菊村　禮

第一回
「晴悟郎誕生」

登場人物

天地悟郎（のちの晴悟郎・バイクツーリスト／六十八歳）
達　吉（友人／六十代）
愛　子（晴悟郎の母・故人／三十代）
先　生（金光教教師／五十代）
ナレーション

（鐘の音。街の音）

達吉　いつ来てもいいなあ、京都ってとこは。

悟郎　修学旅行に来た時とはえらい変わりようだ。

達吉　五十年も前の話をしてどうなる。あ、古道具の店がある。さ、見てゆこ。悟郎さん。

悟郎　（内心の声）骨董品集めなんて爺臭い。古道具をあさって何になる…あーあ、つまらない…。

ナレーション　天地悟郎（あまちごろう）さんは、今年で満六十八歳。長年勤めた会社を三年前に定年退職しました。会社人間だった天地さ

んは、これといった趣味もなく、毎日が空しく、生きる張り合いをなくしていました。そんなある日、妻の勧めで町内会のバスツアーに参加して京都へ来てはみたものの、同年代の達吉さんとも話が合わず、悟郎さんのイライラは募る一方なのでした。

（街の音。白バイが、通過）

悟郎　あっ白バイだ！　カッコいーい！

達吉　ただ取り締まりをやっているだけじゃないか。

悟郎　こんな街中でスピード違反は許せないよ。事故でも起きたらどうする。

達吉　さ、早く行こう！　みんなに遅れちまう…。

（白バイが急停車）おっ、クルッとUターンして、ピタッと止まった。ハハハッ、見事なハンドルさばき。カッコいいなあ。

ナレ　（街の音）翌日、皆と別れて天地悟郎さんが京都の町を一人ブラブラしていると。

悟郎　（内心の声）…あれ、ここは母ちゃんが昔…小さな時によくお参りをしてたって教会じゃないかな。…石碑がある。何て書いてあるんだろう…「昨日を忘れ　今日を喜び　明日（あす）を楽しめ」…母ちゃんがいつも言ってたことだ…。

愛子　（エコー）悟郎！　悟郎の「悟（ご）」の字は「悟（さとる）」と書く。それなのにちっとも悟ってないなぁ…。

悟郎　えっ、どういうこと？　母ちゃん。

愛子　昨日の失敗は、いくら悔やんだところで、もうどうにもならない。忘れろ！　水に流してなかったもんにしろ。大切なのは今日だ。今日一日をどれだけ大切に、いとおしんで生きるかってことなんだよ。それによってあしたを楽しむことが出来るんだから。

悟郎　…今日をどう過ごすかで、あしたが楽しめるかどうかが決まる…。

愛子　今日一日をね、神様がご覧になって、「そうだ！　よくやった！」って思って頂けるように一生懸命に生きる…！

悟郎　…神様が、喜んで下さるように…。

愛子　そうすれば神様は必ず楽しい、晴れ晴れとしたあしたを用意して下さるんだよ。お前、うちの手伝いもせずに本も読まず、ただブラブラして…。そんなことじゃ楽しいあしたはやって来ないよ。さっ、早く宿題！　宿題！

悟郎　…母ちゃん…。

先生　(お茶を入れながら)ああ、そうですか。あなたのお母さん、この教会にお参りしてはったんですか…。

悟郎　ええ、この教会の前に来て、何十年振りかで、お袋の言葉を思い出しました。

先生　ほーう…。お茶、どうぞ。

悟郎　どうも…。昔、昭和三十年代のころ…、おやじは毎日原付バイクに乗って得意先回りをしていました。母は、「事故でも起こしたら」って心配してたようですけど、子どもの私は汗だくになって働くそんなおやじの姿を見て、「カッコいいなぁ」って思ってました。その父親が、亡くなるまで憧れてたのが大型バイクだったんです。おやじの夢を私が、今、叶えてみたい！　全国を回り、何か…何だかよくは分かりませんけれども神様が、「よくやった！」って喜んで下さることをおやじやお袋に代わって、ただ一生懸命に！

先生　それはよろしいなぁ。全国津々浦々を巡ってひと様のお役に立つ。どこにでもあなたの助けを必要としている人たちがきっといるはずですから。

悟郎　そうすれば晴れ晴れとした明日(あす)が待っている。おやじも、お袋もきっと喜んでくれるだろうなぁ…。先生！　おかげさまで生きがいが見付かりました。私、

悟郎というんですが、今日から頭に「晴」という字を付けて「晴悟郎（はれごろう）」と名乗ります。じゃ、行って参りまーす！

《ラジオドラマ》第二回

「木陰のおかげ」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）
美知子（高校生／十六歳）
幸　太（美知子の弟／十三歳）
米　作（村の世話役／五十代）
ナレーション

（バイク走行音）

ナレーション　定年退職後、大型免許を取得してバイクを購入した晴悟郎さんが、まず最初に向かったのはなんと言っても日本一の富士の山。愛車にまたがった晴悟郎さんは、山の麓（ふもと）の一本道を走っていました。

晴悟郎　わあーッ、風。気持ちがいいなぁ…。ああ、喉がかわいた…。あ、大きな木がある。一休みしてゆこう。

（バイク止まって、エンジン切る）
（風が吹き抜ける。せみ時雨）

晴悟郎　涼しいなぁ…極楽、極楽！

ナレ　晴悟郎さんが大きな木の下で一休みをしていると、向こうから歩いてくる娘さんがいました。娘さんは真っ赤な色の大型バイクを見付けるや、物珍しそうに近寄って来て。

美知子　おじさーん…そのバイク、すごーく格好いいねぇ…。

晴悟郎　うれしいねぇ、君のような女の子に褒めてもらえると。

美知子　もう「女の子」っていう年でもないよ。もうすぐ十六。おじさん東京から来たの？

晴悟郎　ああ、そうだよ。

美知子　いいなぁ！　…あたしも！

晴悟郎　ん？

美知子　連れてって。東京。ううん、どこでも構わない。どこか遠くへ行ってしまいたいんだ。おじさん、あたしをどこか遠くへ連れてってー！

ナレ　娘は「美知子」という名でした。「どこか遠くへ連れてって！」と頼んだその理由を、旅人の晴悟郎さんにならば話しても構わないと考えたのでしょうか、美知子さんは淡々とその理由を語り始めたのでした。

美知子　…実は、今朝早く隣の米作さんが家に来て…。

米　作　（ニワトリの鳴く声）美知子ちゃん、美知子ちゃーん。いるかね？

美知子　あら…米作さん…。おはよう。何か…？

米　作　悪いがね、今年の夏祭りの太鼓たたき、弟さんには遠慮してもらいたいんだ。

美知子　…えっ？

米　作　じつはな村長が、知り合いの、またその知り合いの演歌の歌い手を、東京から呼びたいんだとさ。いつになく大掛かりな祭りになるから。…で、弟さんには…

美知子　幸太がたたく太鼓じゃ、立派な歌い手さんに対して恥ずかしいって言うんですね。

米　作　そ、そういう訳じゃあ。俺はただ村長に言われたことを伝えに来ただけ。じゃ、そういうことで。

（せみ時雨）

美知子　弟の幸太、小さな時に病気に掛かってからちょっと難聴で。音が聞きづらいの。だけど太鼓だけは好きでいつも練習してるの。

晴悟郎　ほーう。

美知子　…母さん、この近くの温泉宿で一生懸命働いてあたしたち姉弟を育ててくれ

てるの…父さんは、小さなころに死んじゃったし。

晴悟郎　…君…

美知子　いいの。おじさん、話を聞いてくれてありがとう。…あぁ、いい風…。

晴悟郎　…このバイク、乗ってみる？

美知子　ううん、いい。もう…おじさんに話をしたらなんだか急にスッキリしちゃった。

（車が止まる）

幸　太　（ドア開き降りる）姉ちゃーん！

美知子　幸太！　どうしたの？　米作さんの車に乗せてもらったりして。

米　作　それが、俺が通り掛かると家（うち）の前で幸太君、「姉ちゃんがどこかへ行ってしまった」ってションボリしてた。とりあえず乗せて探しに来たんだが。見付かって良かった！

美知子　あたしを心配して…ごめんね、幸太。

米　作　いや、「ごめん」と言って謝らねばならないのはこっちの方なんだ。実はさっき村長から連絡があって、「東京から呼ぶはずの演歌歌手がスケジュールが合わずに断られた」って。だから太鼓、元どおり幸太君に。

美知子　（感激）ええっ、本当なんですか？

米　作　その歌い手の代わりに特設ステージで歌う役、なんなら美知子ちゃんにって。

美知子　え、あたしに？　いいんですか？

米　作　「お詫びの印だよ」って、村長が。

美知子　わー、うれしい！

幸　太　姉ちゃん、良かったね。バンザイ！　バンザーイ！

美知子　さ、早く帰って練習。太鼓の練習！　ああっ。じゃあたしも頑張って歌のお稽古をしなけりゃ！

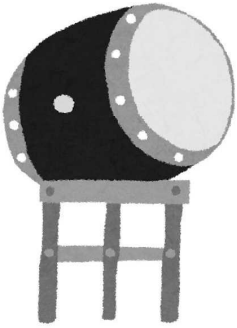
米　作　乗った！　さぁ早く車に乗った！

（軽トラのドア閉まる）

美知子　おじさんのおかげで元気になれた。ありがとー。さよならー！

（軽トラ去る）

晴悟郎　俺のおかげ？　…ちがう…。誰もがみんな重い荷物を背負って生きてる。時には疲れもするさ。…でも、一生懸命に頑張ってるもんには必ず、この木陰で休んでる時みたいに必ずサーッとね、涼しい風が吹いてくるもんなんだよ。ホッと一息ついて、また、ガンバロウ！　って…。神様からのご褒美が…よし！　俺も、ガンバロー！



《ラジオドラマ》第三回

「恋のうず潮」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）
真　理（ＯＬ／二十三歳）
幸　助（フリーター／二十六歳）
滝（無職／八十代）
ナレーション

（バイク来る）

ナレーション　ある秋の日、晴悟郎さんは、渦潮を見に鳴門海峡へやってきました。

（バイク止まる）

ナレ　海峡の近くの公園にバイクを止めて渦潮を間近に眺められる遊歩道の方へ歩みかけると、この辺りの人なのでしょうか、普段着姿のお婆さんがニコニコしながら晴悟郎さんに近づいて来ました。

滝　（海鳥が鳴く）…ええ夕焼けだろう…。

晴悟郎　…ええ。

滝　あたし、ここの夕焼け大好きなんよ…。

晴悟郎　お近くの方なんですか？…遊歩道へは…。

滝　あっちじゃよ。…ほなけど、もう閉もうてしまったよ。

晴悟郎　えっ？　ああ、残念…。

（小型バイク来て止まる）

幸助　ほら見ろ、中に入れないじゃないか。真理が出掛けにグズグズしてるから。

真理　渦潮なんて見なくたっていいじゃん。ほら、夕焼けが奇麗だよ、幸助。

幸助　ああ、…なあ、真理、いつ親父さんに俺のこと話すんだよ。

真理　言えやしないよっ。仕事も持たずに、「バイトだけで食いつないでいる男」だなんて…。

幸助　俺が好きかどうかってこと。親父さんの許可なんて要らねえ！

真理　小さな時に母さんが死んで…。私、父さんにだけは…。

幸助　やっぱり親父の方が大切なんだ、俺よりも…。

真理　違うっ。そういうことじゃないって何回言ったら分かんの！　幸助なんか大嫌ーい！　（駆け出す）

ナレ　興奮した娘さんは、暗くなりかけた遊歩道に向かって駆けて行きました。

幸助　待て！　真理ー、待てよー！

ナレ　幸助さんが真理さんを追いかけました。

晴悟郎　な、なんだ、あの二人…。

滝　あっちには崖が！　は、はよお！

晴悟郎　（転ぶ）イ、イタッ！

晴悟郎　あっ、大丈夫？

滝　おんぶ！　あたしをおんぶじゃ！

晴悟郎　ヨイショ！（滝を背負って駆け出す）

真理　死、死んでやるー！

幸助　何すんだ、よせ！

真理　は、放してー！

滝　（突如）あんた、やめとき！

一同　ええっ！（と驚いて動きを止める）

（岸壁に打ち寄せる波音）

滝　（冷静に）もう六十年以上も昔の話じゃけどな。この男（ひと）と一緒やったら海の泡になって消えてしもうてもええ…ほんなふうに身も心も捧げた人があたしにも…。

一同　…。（真剣に耳を傾けている）

滝　若かったんよ。親の反対を押し切って一つ屋根の下で暮らしてはみたものの、すぐに飽きられ捨てられて…、あたしは病気にかかり…。なんもかんもがメチャクチャ。死のうと思ったんよ…ほんな時、父さん、「一緒に死のう！」って言うてくれて…。

真理　（ハッとなって）おばあさんの、お父さんが…。

滝　「あたし以上に父さんは苦しかったんじゃ！」…そう、気がついたの…。ほんで死ぬん、止めたんよ…。

晴悟郎　…そんなことが…。うちのお袋がよく言ってました。「人の苦しみは神様の苦しみ…」って。

真理　苦しいのはあたし一人じゃなかったんだ…。

幸助　真理の親父さんも…。

真理　…えっ。

幸助　真理、帰りな。家へ…。俺、まともな仕事を探して近いうちに必ずあいさつに行くから…。

真理　幸助！　ウッ…ウウウ…（うれし泣き）

（バイク走行音）

真理　すみません。見ず知らずのおじさんに送ってもらって…。

晴悟郎　ハハハッ、よくお袋が言ってた。「人を助け

て我が身助かる」って。

真　理　ええッ意味がよく分かんない。

晴悟郎　自分が一生懸命に何かをしてあげて相手が喜ぶといい気分になる。また、誰かのために役立つことをしてあげよう！　小さなことでも構わない。そんなことを積み重ねてゆくと今度は自分が困った時には必ず神様が助けてくれるって、そんな意味かな。

真　理　おじさん、良かったね！

晴悟郎　えっ？

真　理　だってあたしを助けてくれたから…今度おじさんが恋に悩んだ時には神様が！

晴悟郎　恋？　この年齢（とし）で!?

真　理　まだまだイケてるよっ。

晴悟郎　ハハハッ、アリガト！……二人で幸せになりな！

真　理　うん、おじさんも…ね！

晴悟郎　ウン！

《ラジオドラマ》第四回

「ずっといっしょに」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）

恵美子（主婦／七十八歳）

ナレーション

（激流）

ナレーション　大型の台風が町を襲い、川の堤防が決壊し、住宅街にも大量の水が流れ込みました。

晴悟郎　この辺りかあ…堤防が決壊して洪水の被害に遭った町ってのは…。いやー、ひどいもんだなあ。恐いなあ…自然の威力ってのは…。

恵美子　…ヤレヤレ…この辺り、ついこの間までは青々とした水田が広がって…今じゃ、もう。はあ。気が滅入るだけだ。長生きはするもんじゃないねぇ…。

晴悟郎　あの…、こんにちはー。

恵美子　（うさん臭げに）派手な色のバイクだねえ…どこから？

晴悟郎　東京です。どこへ行くのもこれだと手軽で。

恵美子　いいねえ。あたしなんか、生まれた時からこの町に住んで、外に出る機会もあまりなかった…死ぬまでここでって、そう思ってたけど、まさかこんなことになるなんて…。

晴悟郎　（暗たんとして）何かお手伝いが出来ることでもあればと…。

恵美子　ありがとう。でもどこから手を付ければいいかの…。

晴悟郎　でも、せっかく来たんですから何か…。

恵美子　そう。…じゃ、とりあえず家（うち）でお茶でも。

晴悟郎　（けげんな思い）…お茶？　悪いですねえ、お手伝いにやって来たのに。掃除だとか水くみだとか何か力仕事でもあれば…。

（鉄ビンの湯チンチンと鳴っている）

恵美子　ま、いいからいいから。コーヒー？　それともフツーのお茶？

晴悟郎　ええっと…じゃあお茶で。

恵美子　よしよし。

（ストーブの上の鉄ビンの湯沸く。鉄ビン、ストーブから持ち上げて湯呑みに注ぐ）

恵美子　お茶が入りましたよ。さあ。

晴悟郎　や、こりゃどうも。（お茶を飲む）あー、おいしい！

恵美子　（お茶一口飲んで）ああ…。

（鉄ビンの湯の音）

晴悟郎　…。

恵美子　いいねえ…鉄ビンの湯が沸く音…。それを、一緒に聞ける人がいるってこと…。

晴悟郎　…あの、ご主人…は？

恵美子　…死んだよ。もう十何年も前の話、病気で…。私は独りっきり。

晴悟郎　ああ…そうなんですか…。

恵美子　あんた、連れ合いは？

晴悟郎　留守番してます、東京で。

恵美子　結婚は恋愛？　あたしは見合いだったから、「この人と一緒にいたい」なぁんて胸を焦がしたことは、ただの一度もありゃしなかったけど…。

晴悟郎　私は一応恋愛結婚ですけれどもね。…でも、四十年以上も連れ添ってると、今更「一緒にいたい」も何も。アハ…アハハハ…。

恵美子　（ピシャリと）ずっと一緒にいられるなんて、絶対にありゃしない！　今度の台風でそのことがよおく分かった。朝夕見慣れてた庭の柿の木。春になればみずみずしい若葉を出し、秋になりゃ赤い実

をドッサリ付けてくれる…カラスが実を突っつく…あたしと顔を見合わせてね、「オレにも寄こせ。カアカアー！」なあんて鳴くから、つっつくだけつっつかせて残りをね、干し柿にしてお父さんと二人でお正月に食べて…。

晴悟郎　…。

恵美子　死ぬまでずーっとあたしはそんな景色と一緒に暮らしてゆけるとばかり思ってたんだよ、ついこの間までは…。

晴悟郎　(悲痛に)…おばさん…！

恵美子　(フッと明るく)そんなに悲しそうな顔をするんじゃないよ。(お茶飲む)ああ、…おいしいねぇ、このお茶。

晴悟郎　はい、おいしいです。

恵美子　ウフ…ウフフフ…(と突然おかしそうに笑う)。

晴悟郎　(不思議そうに)…何が、何がそんなにおかしいんですか？　僕の顔に何かが付いているとでも？

恵美子　違う。なんだか急にうれしくなっちゃったもんだから。

晴悟郎　うれしい？

恵美子　あたしがお茶に誘ったら、お兄さん、「それじゃあ…」って言って、ここまで付いて来てくれたじゃないか…。「一緒にいたい」って、そんなふうに思ってくれる人が一人でもいたんだってそう思ったら…。すぐにサヨナラになるけれどもね、それでも…。

晴悟郎　（遮る）お姉さん！

恵美子　（ビックリして）オネエサン？

晴悟郎　「お兄さん」って呼んでくれたからそのお返しに。人や風景は変わる…ずっと一緒にいられるなんてことはない…けれど…。今、死んだお袋がよく言ってたことを、ふと思い出したんです。

恵美子　お母さんが言ってたこと？

晴悟郎　「神様とならばずっと一緒に居られるって…。

恵美子　…神様…か…。今の今まで神様なんて本当にいるのかって思ってたけど、こんなにつらい時にあんたのような心優しい人に巡り合わせてくれたのがもしも神様って言うんならば…。

晴悟郎　俺も、俺もそう思う…。

恵美子　また訪ねて来ておくれよ。今よりもずーっと元気になっているからさ。

晴悟郎　うん、来る！　来るよ！　また必ず！…そして一緒にお湯の沸く音を聴こう！

（湯が煮えたぎる鉄ビンの音）

（バイクのエンジンの音）

晴悟郎　…あれ、俺は結局何をしに来たんだっけ？

《ラジオドラマ》第五回

「橋渡し」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）
茂　（クリーニング屋／五十代）
敏　夫（菓子屋／四十代）
良　江（敏夫の妻／四十代）
ナレーション

（バイクのエンジン音）

晴悟郎　早く見たいなぁ…卑弥呼の墓。今までにもそうじゃないかって言われたものはいくらもあったけど、今回発掘されたのは、「可能性は高い」って。

ナレーション　――という訳で、晴悟郎さんは奈良県のとある郊外の道を走っていました。前方には大きな橋が。ところがその橋を渡ろうとして晴悟郎さんはビックリ仰天してしまったのでした。

晴悟郎　（バイク止まって）な、何。…「老朽化につき橋桁修理中。迂回して下さい」だと？

どこへ行ったらいいんだ。

ナレ　その橋詰には、小さなクリーニング店がありました。晴悟郎さんは道を尋ねようとその店に入りました。

（ガラス戸、開ける）

晴悟郎　…こんにちは。あのぅ…コンニチワー。

敏男　私の歌とどこが違うっていうんだ。なぁ、お前。

良江　そうよ、あなたの声の方がずーっといいと思うわ。

茂　（オドオドと）だ、だって、指揮者の先生から言われたんですよ。「この歌の雰囲気にあなたの声がよく似合ってるから独唱のところを歌って下さい」って。

良江　何か持ってったんじゃないの？　指揮者の先生に。

敏男　洗濯代をただにしてやったとか。

茂　そ、そんな！

良江　…ま、歌うがいいわ。良いことと悪いことは互い違いにやって来るってよく言うから…。

敏男　…ま、せいぜい気を付けるんだねっ。

（ガラス戸　乱暴に閉まる）

ナレ　事情はよくのみ込めずにいましたが、道を尋ねる雰囲気ではなく、晴悟郎さんは、店をそっと出て行きました。

（バイクのエンジンかける）

茂　あ、待って。お客さーん…ちょっと、待って下さーい。その橋、渡っちゃダメ！

晴悟郎　…え？

茂　（近付きながら）今日は日曜日だから工事を休んでますけど…この橋、もうガタガタで…ちょいと遠いけれども廻り道、私が教えますから。…今、車出してきます。付いて来て下さーい。

晴悟郎　え、あ、ハ、ハイ。どうも、すみませーん！

（車止まる。ドア開く。バイク来て止まる）

茂　…この橋、新しいから。…さ、安心してここを渡って。卑弥呼さんのお墓は、三十分もあれば着きますよ。

晴悟郎　え、どうしてそれが分かるんですか？

茂　新聞に出たでしょ、あれからこっち、多いんですよ、道を尋ねる人が。その都度、教えて上げて。

晴悟郎　お仕事の合間にですか？　…それはご苦労さんなことで…。

茂　ハハッ、あの自分で言うのもなんですけど、「親切」が何よりも好きでね。だから発表会で「独唱」もさせて頂けるようになったんじゃないかって、実は内心悦に入っていたんですけど。

晴悟郎　さっきの、あの人たち、何なんですか、

随分失礼な…。

茂　仕方ないんですよ、合唱団の先輩ですから。

晴悟郎　…合唱団。地元のですか？

茂　ええ、年に一度発表会が…。今年は何だか急に規模が大きくなっちゃって…オーケストラ呼んだりもして。そしたら…。

晴悟郎　嫉妬って奴だね、ほっときなさい。そんなのほっといたらいい。

茂　最初はそうするつもりだったんですけど近頃じゃ悪口を言われるたんびに、のどの奥がヒリヒリして…はぁ、もういっそ降りちゃおうかと…。

晴悟郎　バ、バカヤローッ！

茂　エエーッ！

晴悟郎　あ、ゴメンゴメン。…でも…ええーッと、お名前は？

茂　し、茂です。

晴悟郎　茂さん、俺だって大型免許をこの年齢で取るのには随分苦労もした…。でも、「出来ない」って、最初から諦めちゃったらもうおしまい。「やらせてもらえるかな。よし、やらせてもらおう！」って思った途端にパッと明かりがともるんだよ。渡れないと思ってた橋も神様が…。

茂　神様！？

晴悟郎　茂さんを引き合わせてくれて…。

茂　…そんなもんなんですかねえ…。

晴悟郎　要するに、やる気があるのかないのかっ

て問題。茂さんは、歌いたいの？　それとも…。

茂　（遮る）歌いたい！　も、もちろん歌いたいですとも！

晴悟郎　だったら話は簡単。神様に願って願って。願って、願って…それだけで、オッケー？

茂　オッケーッ！

晴悟郎　本当に？　本当に？

茂　「信じる心に花が咲く！」ってお袋がよく言ってた。

晴悟郎　…信じる…心に…。

茂　花が咲く！　歌える！　うまく歌えるって！

晴悟郎　ああ…うん、何だか勇気が湧いてきた。ありがとう！　本当にどうも…。

晴悟郎　なあに、ここまで連れて来てくれたお礼ですよ。「お礼が大切。何よりも！」とも言ってたなぁ、お袋…。

ナレ　晴悟郎さんは、茂さんに連れて来てもらった危なげのない橋を渡り、卑弥呼の墓だと言われている発掘現場に無事到着しました。

晴悟郎　ワー、デッケェ墓だなぁ…ここに卑弥呼が…ロマンを感じるなぁ…。茂さん、独唱、頑張ってな！　俺も東京で応援してるから！

《ラジオドラマ》第六回

「いいとこメガネ」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）

晴　美（催場の臨時店員／四十代）

淑　子（主婦・晴美のＰＴＡ仲間／四十代）

酔っ払い（ヨネの息子／五十代）

ナレーション

（船のエンジン音。波、カモメ）

アナウンス　（スピーカーから）皆様、本船は間もなく伊豆大島、岡田港に着岸いたします。長らくのご乗船、お疲れ様でした。

晴悟郎　風もなく海も穏やか。船も揺れなかったし。最高！

ナレーション　このところ髪の毛が薄くなり心配していた晴悟郎さんは、「育毛には椿油がよく効く」という記事を読み、椿油の産地として名高い伊豆の大島への旅を思い立ちました。どうせ尋ねるの

ならばと晴悟郎さんは三月半ばの椿祭りの日を選んだのでした。

（大島太鼓。人々の声、さんざめいて）

晴悟郎　やあ！　にぎやかだなあ。あれは大島太鼓ってやつか。お？　あちこちにテントを張って名産品を売ってる。さて、どの店で買おうか…。

晴　美　いらっしゃいませ。

晴悟郎　椿油、いいのがありますか？

晴　美　みんな最高ですよ。

晴悟郎　ほお、椿の実で作ったブローチなんかもあるんだね。

晴　美　ええ、クサヤも、明日葉（あしたば）も、島の特産品なんですよ。どれを差し上げましょう。

晴悟郎　椿油を一瓶下さい。

晴　美　ありがとうございます。はい、どうぞ。

晴悟郎　じゃ、お代。

晴　美　どうも。…あら、お客さーん。サングラスをお忘れに！　…行っちゃった…。ま、いいか。あとで取りにくるかも。

淑　子　（店内に入ってくる）…晴美さん…。居た居た、お宅を訪ねたら留守だったから。ここでバイトしてるって聞いてたから寄ってみた。良かった、会えて…。

晴　美　・・淑子さん、今日は何か…。

淑　子　謝恩会のことよ。卒業式まで後もう一週間しかないのよ。

晴美　打ち合わせならばもうこの前…。

淑子　それが少し変わっちゃって…。

晴美　…えッ？

淑子　あのね、東京から偉ーい先生が来ることが決まって、私は船までお送りする係になっちゃったの。だから司会はあなたに。

晴美　ええーっ、そ、そんな！

淑子　息子たちがお世話になった中学校じゃないの。

晴美　あの、人前で話すのがあたしは大の苦手で…。

淑子　「苦手」を「得意」に変えるチャンスよ。じゃ、ヨロシクー！（と去る）

晴美　ああ、ちょっ、ちょっと、ま、待って！

…あーあ、淑子さんっていつも一方的で他人（ひと）の気持ちを考えることが少しもないんだから。大嫌い！

酔っ払い　…姉ちゃん、コレ、すぐに焼いてくんない？

晴美　ええ、クサヤをここで？

酔っ払い　腹が減っちゃって。金、少し多めに払うからいいだろう、姉ちゃん…（晴美にしなだれかかる）

晴美　で、出来ません。飲み屋じゃないんですから。（酔っぱらいがエヘヘと晴美の肩を抱く）いやらしい。止めて下さーい！（酔っぱらいを突き倒す）

酔っ払い　（倒れる）イ、イテテテテ…！　何すんだ。俺は客だぞ！

晴　美　だって、お客さんが…。

酔っ払い　血が出てる！　転んだ拍子に切れたんだ。病院代をよこせー！

淑　子　晴美さーん。これ、渡すのすっかり忘れちゃってた。（酔っぱらいを見て）どうしたの？

酔っ払い　イテテテ。

晴　美　（弱りきって）…淑子さん…。

淑　子　（察して）ああ、おじさん。足が痛いの？…それじゃ、（とバックの中から軟膏（なんこう）を出す）これを塗って。ばんそうこうも貼って…。「痛いの痛いの飛んでゆけー！」…ほら、もう治ったでしょう！

酔っ払い　な、治ったような…。

淑　子　私ね、今、おいしいパンを持ってるの。おじさん、食べて。あっ、椿祭りのパレードがそろそろ始まるわ。あのね、奇麗なあんこさんたちが、そろって踊るのよ。おじさんも早く、早く！

酔っ払い　このパンを俺に？（パン食べる　モグモグ）うめえ！　おねえさんも一緒に行ってくれるのかい？

淑　子　お姉さん？　ええ。行きましょう、行きましょう。（と酔っ払いと共に出て行き掛けて）あっ、晴美さん、これ、司会の時の原稿よ。読みさえすりゃいいんだから。じゃ。（と去ってゆく）

晴　美　…淑子さん、悪い人じゃなかったんだ…

晴悟郎　…あのう…。

晴　美　あら、さっきの…。

晴悟郎　サングラス、ここに置き忘れてませんでしたか？

晴　美　これですね！　ハイ、どうぞ。

晴悟郎　良かった！　これが無いとどうもね。…あっ、「いいとこメガネ」って、知ってます？

晴　美　知りませんけど、お客さんのそのサングラスが…？

晴悟郎　違う。違うけれどもお袋がよく言ってたメガネのことを思い出しちゃって…。そのメガネを掛けていると他人のいいところばっかりが見える…。

晴　美　そのメガネ、あたしにちょっと掛けさせて下さい。

（メガネ掛ける。宙に向かい呼び掛ける）

晴悟郎　淑子さーん！　あなたって、頭脳明せきで臨機応変で、結構情け深くって、テキパキと事を運ぶスーパーレディーよ！…

（メガネを外す）

晴悟郎　お客さん、本当でした！　このメガネがそうだっていうワケじゃあ…。

晴　美　これからずっと掛けます。「いいとこメガネ」を心の中に…。本当にどうもありがとうございました！

晴悟郎　…心の中に…か。それならば俺にも出来る！　うん、大島の椿油を使うたびに掛けるとしよう！　「いいとこメガ

ネ」を…。ハハハッ、じゃ、椿祭りを楽しんできまーす。

晴　美　行ってらっしゃーい！

（バイクのエンジン音）

《ラジオドラマ》第七回

「はいはい」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）
謙　次（フリーター／二十五歳）
真津子（主婦／六十五歳）
信　一（真津子の夫／七十歳）
赤ん坊（真津子夫婦の孫／一歳）
乗客たち
車　掌
ナレーション

（春の嵐）

車　掌　お知らせ致します。強風のためにこの列車はしばらく当駅で停車しまーす。

（乗客たちのざわめき）

謙　次　しばらくストップ？　マジかよう…駅の売店で酒売ってるかなあ。（と出口の方へ去る）

真津子　困ったのぉ、あど少しだのに…。

信　一　ん、ミルクは？

真津子　大丈夫。あんた、トイレは？

信　一　…んだな、降りるが…。

真津子　あんた、おむつば持っていって。

ナレーション　ここは青森県の陸奥湾近くを走る、ローカル線の小さな駅です。春の嵐で列車が立ち往生し、駅の待合室に乗客が避難をしたちょうどそのころ、バイクで近くを走っていた晴悟郎さんもまた避難のためにこの待合室へ入って来たのでした。

（乗客たちのざわめき）

晴悟郎　お邪魔します。いいですか、お仲間に入れてもらっても…あ、すみません。おや、可愛い赤チャンだ。ベロベロバー、ハハッ、笑った、笑った。どうも。お孫さんですか？

信　一　んだ。

真津子　先日娘が転んで、足の骨折って入院してしまって…

信　一　しばらぐこの子ば家で預かることになったのさ…

晴悟郎　それは大変だ。おいくつ？

真津子　もうすぐ一歳さなるんだ。

晴悟郎　じゃもうはいはいが出来るでしょ？目が離せませんね。

信　一　んだのさ、もう追いかけるのが大変で…。

謙　次　表のバイク、オジサンの？　東京から？

晴悟郎　俺も東京からなんだ。

謙　次　あ、そう…じゃ今は実家へ帰るの？

晴悟郎　いや、そういうワケでも……。

晴悟郎　ツマミもってる？

謙　次　うん、ピーナッツなら。

晴悟郎　一緒に飲もうぜ。

謙　次　飲酒運転は禁止なんですよ。

晴悟郎　風やまねえからさ、（と飲む）…（息吐いて）家さは戻りたくねえっす。

謙　次　親御さんが、待っているんじゃないの？

晴悟郎　帰ったって父っちゃに殴られるだけだ。

謙　次　殴られる？

晴悟郎　うぢの父っちゃは漁師で、俺も中学出てすぐ海に出たんだけどつらくてさぁ、東京さ出てサラリーマンさなるべど思って！　三年前に憧れだけで飛び出して来たものの…。

晴悟郎　その間手紙ぐらいは出してたんだろ？

謙　次　なーんも。

晴悟郎　お袋さん、心配してるぞ。

謙　次　心配させときゃいいのさ、親ってのは心配するのが仕事って、どこかに書いてあった。ハハハッ…。

晴悟郎　…。

真津子　（赤ん坊　はいはい）ああっ、危なーい！

信　一　（杖落とす。子どもを抱きかかえる）オットットット…。

真津子　ああ、危ねがった。

信　一　気を付けねばな。

真津子　（杖拾って）はい、杖。

信　一　ん、ありがと。

真津子　あー、でも良かった、ケガしなくて。ねえ、あっちゃん、よしよし。（とあやす。赤ん坊、笑う）

晴悟郎　…君にも。

謙　次　…えっ？

晴悟郎　あったんだよ。はいはいをしていた赤ん坊のころが。

謙　次　…それが？

晴悟郎　一時（いっとき）も目を離さずに、見守ってくれた人たちがいたからこそ君は、今、ここにこうして…。

謙　次　…。

晴悟郎　何も知らないんだ、あの赤ん坊は…。椅子から転げ落ちそうになった自分を、足の悪いじいちゃんが杖を放り投げて、駆け寄って助けてくれたなんてことは…。神様も…。

謙　次　神様？

晴悟郎　親とおんなじ。今にもどこかから転落しそうな俺たち人間を、いつもヂッと見守っててくれているから安心だって、お袋がよく言ってた。…おっ、赤ん坊、安心して眠っちゃったよ。ホラ！　可愛いいなぁ…。

謙　次　…俺にもあんな時が…。父ちゃ、俺のこと待っててくれるかなぁ…。

（乗客たちのざわめき）

車　掌　大変長らくお待たせを致しました。風が収まりましたので、列車の運行を間もなく再開いたします。

晴悟郎　君、乗らなくてもいいの？

謙　次　おじさん、俺ん家さ来てくれない？

晴悟郎　…え？

謙　次　親父もお袋も心配性でさぁ…俺のことばかりじゃねんだ…いつも何かをクヨクヨ悩んでばかりいるがら…さっきの話、聞かせてやってよ。

晴悟郎　さっき？…何だっけ？

謙　次　ホラ、神様が見守っててくれてるがら安心だって。話してよ、俺じゃうまく伝えられないから。ご馳走してくれるよ。

晴悟郎　えっ何を？

謙　次　ホタテ。今、漁の真っ最中だから。

晴悟郎　ワオーッ！

謙　次　バイクの後ろさ乗せて！

晴悟郎　ＯＫ！　津軽海峡までまっしぐらだー！

謙　次　運転、大丈夫？

晴悟郎　神様が付いててくれるから安心！

謙　次　あ、んだったね。心配するだけ損だ。

晴悟郎　その通り！　アハッ…アハハハ…。

晴悟郎　さっき？…何だっけ？

謙　次　アハハハ…。

《ラジオドラマ》第八回

「虫に喰われる!?」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）

範　子（主婦／三十代）

喬　（範子の子ども／六歳）

悟　（喬の友達／六歳）

千　春（女医／四十代）

ナレーション

（何かにつまづいて倒れる）

晴悟郎　うわぁー！　…い、痛ーい！

（山の中、鳥の鳴き声など）

ナレーション　長野県の、とある林道をバイクで走っていた晴悟郎さんは、用を足したくなり、バイクを止めて近くの藪の中へ入って行きました。ところが倒れていた大木にけつまずき、ケガをしてしまったのでした。

晴悟郎　何だ、この木、中がスカスカじゃないか。虫が食ってらあ。倒れるワケだ。イタ…アイタタタ…あっ血が出てる。心配だから病院に行くかぁ…。

（病院、ロビーのざわめき、
呼び出しのアナウンスなど）

千　春　うん、大したことないわ。でもバイ菌でも入ったら厄介だから消毒しときましょう。ちょっと、染みますよ。

晴悟郎　先生、あの林道はお国の…ほら、何てったっけ、営林署？　役所が管理してるんでしょ？
虫喰いの大木を放っとくなんて。これから役所へ文句を言いに行ってきますよ。

千　春　藪の中なんでしょ？

晴悟郎　ああ、染みるぅ…。

千　春　（笑って）文句って、言うとスッキリするかもしれんけど、虫が食いますよ。

晴悟郎　（不思議そうに）え、虫？　どこを？

千　春　こ・こ・ろ。

ナ　レ　晴悟郎さんが待合室で薬が出来上がるのを待っていると…。

（ドア乱暴に開いて、数人の足音、急いで来る）

悟　先生ー、い、痛い、痛いよう…。

千　春　治療室へ。早く！　大丈夫よ！　しっかりー！

喬　悟くーん！　目、見えなくなっちゃったら…僕のせい。うわーん！（激しく泣きじゃくる）

（治療室のドア閉まる）

喬　（シクシク泣いている）

晴悟郎　（恐る恐る）…あの、ジュース買ってきたんで、良かったら…。

範　子　え？　あ、…どうも…（胡散臭げに）

晴悟郎　…お母さん、良かったら事情を話してくれませんか。

範　子　ああ、先ほど幼稚園の庭でうちの子が振り回していた木の枝の先が運悪く悟君の顔に当たって…。

晴悟郎　…それで…？

範　子　悟君、目の辺から血を流して…も、もしかしたら…。

喬　（突然、ワーッと激しく泣く）

範　子　黙りなさい！（喬の頬をピシャリと叩く）

喬　ワー（さらに激しく泣く）

晴悟郎　（突然叫ぶ）虫だ！

範　子　…えッ？

晴悟郎　私、さっきちょっとイライラしてお医者の先生に文句を言ったら、「あなたの心は虫に食われてる」って。

範　子　虫ッ？

晴悟郎　起きてしまったことはもうどうにもならない…だったら今出来ることは何だろうって、よく考えなきゃ。虫食いだらけの心じゃ、冷静に事を運ぶことが出来ない。それじゃお子さんが可哀想…。…心が…虫に…。

範　子　うん、心配事、不安な感情。それって悪い虫の大好物でね、モゾモゾモゾって心の中で大暴れ。人を責めたりののしったり…。もうみんなその悪い虫のせいなんだ。だったらそんな虫はパーッと追っ払っちゃって…。今、出来ることを一生懸命にする！

晴悟郎　何なんですか？　今出来ることって…。

範　子　祈ること。神様に。悟君の目の回復と、あなたのお子さんの心の立ち直り…。

晴悟郎　（初めて気が付く）…喬の心？

晴悟郎　こういう時にこそ、「お母さんが付いてるから大丈夫！　安心して！」って言って安心させてあげなきゃ！

範　子　分かりました！　ゴメンね、喬！　神様ー！　悟君の目が、目が治りますように！　（祈る）

喬　僕も一生懸命にお祈りする！

晴悟郎　…私も…！

（治療室のドア開く）

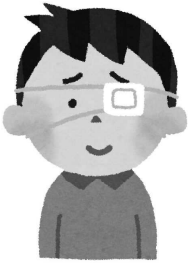
千　春　（明るく）幸い傷は眼を外れてました。1週間も経てば元通りに。

範　子　…ウ、ウウウ…（うれし泣く）。

喬　（泣きながら）良かった悟くん、良かった…。

範　子　（泣き笑う）本当に。（晴悟郎に）あなたのお蔭です。どうもありがとうございー…。（辺りを見回すが、晴悟郎の姿はもうない）…あら…どこへ、行ってしまわれたのかしら…。

（バイク疾走音）



晴悟郎　（鼻歌交じり）いいことしたなぁ…。俺ってけっこうやるじゃん…。おっと、鼻高々になるってェのも心の中に悪ーい虫が。ヤバイ！　気を付けなくちゃ！

《ラジオドラマ》第九回

「ずっと晴悟郎」

登場人物

晴悟郎（バイクツーリスト／六十八歳）
正　也（小学五年／十一歳）
正　一（正也の祖父／七十代）
道　子（晴悟郎の妻／六十五歳）
ナレーション

（バイクのエンジン音）

ナレーション　九月に入ってもまだ東京では厳しい残暑が続いていました。でもここ北海道では秋の風が吹き渡っていました。

晴悟郎　ヤッホー！　スゲエー！　どこまでも続く一本道。空と道路と俺っきゃいない。うーん、気持ちがいいなぁ…来て本当に良かった！　さてと、ここらで一休みといくかぁ…。

（バイク止まる。エンジン切る）

（鳥の鳴き声）

ナレ　晴悟郎さんは、一本道の脇にバイクを止めると、近くの草原に寝転んで、青い空を眺めながらあしたはどこへ行こうか、何を食べようかと思案をしつつ旅の満足感に浸っていました。

正也　（自転車来て止まる）わあーっ、でかいバイク。カッコいいなあ。おじさん、触ってもいい？

晴悟郎　え？…ああ乗りたきゃ乗っても構わないよ。（と言いながら起き上がって）

正也　ホント？

晴悟郎　よーし、おじさんが押さえててやる。…それ、ヨイショ。（正也をバイクに乗せる）

正也　わーっ！

晴悟郎　（正也の靴を見る）何だ、君の靴。ずいぶんボロボロじゃないか。待ってろ！（バイクの後ろの物入れから運動靴を取り出す）ほら、この運動靴、札幌で買ったんだけどサイズを間違えてね…窮屈だからやるよ。

正也　えっ、いいの？

晴悟郎　今は少し大きいだろうけどすぐにちょうど良くなるよ。

正也　ありがとう。

（携帯電話　鳴る）

晴悟郎　…誰からかな？　…あっ、女房だ。（取

る)…？

道　子　(携帯電話の声)あ、あなた！　た、大変！　ド、ド、ド、ドロボー！　ドロボーが入ったの！

晴悟郎　な、何だって！

道　子　早く！　早く帰ってきて！

晴悟郎　何を盗られた！　通帳は？　カードは？　印鑑は？　もお、全財産、盗まれでもしたらもうバイクの旅が出来やしないじゃないか！

道　子　まあ、ヒ、ヒドイ！　お金のことばかり言って…。「ケガはないのか無事なのか？」ぐらい言ってくれたっていいでしょ！

晴悟郎　う、うーん…お前がうっかりしてるからだ！

道　子　はぁ？　とにかく早く帰ってきて！

晴悟郎　(牛が鳴く)正也君のお祖父(じい)さんですか。助かりました。こうしてバイクをお預かり頂けるなんて。

正　也　飛行場までは、お祖父ちゃんが車で送ってくれるって。

晴悟郎　二、三日で戻って来ますからご面倒でもバイクをよろしく。

正　一　お安い御用です。…あの、この運動靴はお返し致します。

晴悟郎　…えっ？

正　一　実は我が家(や)には規則がありまして…。

晴悟郎　規則？　何ですか。それ…。

正　一　先祖が内地からここへやって来た時…明治の時代ですよ。大きな川が氾濫(はんらん)を繰り返すんでこの辺りは沼地でさぁ。それを、曾祖父・祖父らが来る日も来る日も桶で水をかいて…盛り土をしてさぁ…そんでようやく出来上がったのが今あんたが通って来たあの道なんだわ。

晴悟郎　…！

正　一　鮭の皮を藁靴(わらぐつ)に張ってた、とも聞きました。脱げるとヒルが足中にくっついて痛くてたまらない。そんでも水をかいて…。靴はうちらにとって生命(いのち)なんだわ。大切に、大切に、いよいよ履けなくなるまで大切に使う…時代錯誤と思われるかもしれませんが、先祖のそったら苦労を私は孫子の代にまで伝えていきたいんだわ…。お気持ちだけはありがたく頂きますが、この靴は…。

晴悟郎　はぁ、よく、よく分かりました。

（携帯が鳴る。晴悟郎取る）

道　子　（携帯電話の声）もしもし、あなた…大丈夫よ、もう無理をして帰って来なくても。

晴悟郎　…え？

道　子　（携帯電話の声）通帳も、カードもハンコもみんなあったのよ。警察の事情聴取も無事に済みました…実際の被害はほとんどなかったの。

晴悟郎　…け、けど…。

道　子　（携帯電話の声）（遮る）神様の、神様のおかげなんだわ。

晴悟郎　…神様…の？

道　子　（携帯電話の声）あなたが旅をしている時、あたしは毎日教会へ通ってお祈りをしているんですもの。

晴悟郎　ええっ、…これまでも？　毎日？

道　子　（携帯電話の声）あなたのお母さんだったらそうなさっていただろうなって。

晴悟郎　…み、道子ー！

道　子　じゃあね！（携帯電話切る）

晴悟郎　お世話になりました。また、このまま旅を続けられることになりました。

正　一　ほう。それは良かったっしょ。北海道の旅を思う存分楽しんで下さい。

晴悟郎　はい、ありがとうございます。

（バイクサウンド）

晴悟郎　（バイクの疾走音を背景に独り言）…北海道！　バイクに乗って大自然の懐に抱かれる幸せ！　…でも、ラベンダーの花咲く道も、渓谷に掛かる大きな橋も…どれもこれもみな先人が苦労をし築きあげてくれたものばかりなんだ。そのことに、俺はようやく気が付いた。道路や橋ばかりじゃない！　俺の無事を毎日神様に祈ってくれている女房…

この愛車を、ヘルメットを、そしてブーツやサングラス…いろんなものを作ってくれた人たち…大勢の人々の世話になって…俺は初めてこのバイクの旅を…。

（次第に泣けてくる）

生きている限りどれだけ多くの人や物に世話になっていることか…、人生という旅が終わりを告げる日まで俺は言い続けよう、毎日、「ありがとう！」と…。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送　日曜日　あさ４時３０分
東海ラジオ放送　金曜日　あさ５時２５分
朝　日　放　送　水曜日　あさ４時５０分
ＲＫＢ毎日放送　日曜日　あさ６時５０分

こころで聴くおはなし　検索